連載　第29回

# 私のはんせい記

## ～「改修設計」事始め～

建築家　三木　哲

新宿駅西口地下街に出現した段ボールハウス群

### ● JIA住宅再生分科会の発足

バブル経済崩壊後に阪神大震災が日本を襲った。多くの勤労者がリストラされた。

それまで過ごしていた自宅や寮などの住居を退去させられ、或いは自宅に戻れなくなった。

これらの人々は、山谷や釜ヶ崎、横浜の寿町などのドヤ・簡易宿泊所にさえ住むことが出来ない。新宿西口の地下街から東京都庁前広場まで、ホームレスの人々が段ボールやブルーシートを資材としてテント・小屋掛けをしたりする者が増加し、埋め尽くされた。

段ボールハウス群は新宿、代々木公園・隅田川河畔にとどまらず、日本全国、各所に出現した。

ホームレス人口は、バブル崩壊後の不況下でその数は増し、2003年1月～2月の厚生労働省調査では全国で25,296人に達していた。このホームレスは中高年男性が95%を占めていた。

行政はホースで床に水を撒いたり機動隊を使い、新宿地下街から強制的に排除した。

日比谷公園ではホームレスを対象に炊き出しするボランティア活動が大きく報道された。

一方で、就職氷河期と言われ、非正規雇用の若者が増加した。

主に日雇い派遣労働と呼ばれる雇用形態で生活を維持している非正規雇用の若年労働者も増大し、24時間営業のインターネットカフェや漫画喫茶などが、そこをホテル代わりにして就寝・夜明かしをする若者で繁盛した。

こういった定住場所を持たない（持てない）者の多くは、かつてはドヤをはじめカプセルホテル、深夜をまたいで仮眠が取れるサウナや健康ランドなどを生活の拠点としていたが、2000年代に入ると、深夜に長時間・低額料金で利用可能な「ナイトパック」やシャワールーム、個室席などを備えた、インターネットも使える複合カフェが普及した。東京・蒲田地区などで、ネットカフェ難民の存在が目立つようになった。

職に就けない若年労働者は劣悪な居住環境のネットカフェに寝泊まりし、火災事故で多くの焼死者を出す痛ましい事故も発生した。

阪神大震災後、日本の住宅のストック数は世帯数を12%以上上回り、飽和状態になっていた。住宅をつくればつくるほど過剰となり、過剰ストック時代が到来し、空家や廃屋が増加した。

にもかかわらず、住宅プレハブメーカーやマンションデベロッパーは地震に強い、安全・安心な住まいを売り物に、不動産販売に狂奔していた。

日本国憲法第25条では「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」としている。国民の最低限の生存権を保障すべき政府は、福祉や社会保障を目的とする公営住宅を建設せず、持家政策を堅持し、国民に住宅投資を推奨し、これにより景気浮揚を図ろうとしていた。

住宅ストックが過剰化、空屋が増加していたにもかかわらず、ホームレスが街にあふれていた。

ネットカフェで日常を送る若者の出現と火災焼死事故は、日本の持家政策の破たんを示していた。

過剰化したストックと、破綻した持家政策に対し「もう住宅はいらない！既存建物を使い続けることこそ肝要である」と考えた。

既存の戸建て住宅を壊して建替えるのではなく、改修リフォームする流れをつくり出すことこそを、建築家は社会に提起すべきではないか。1998年、私は竹田恭子さん、岸崎隆生さんと日本建築家協会・メンテナンス部会のもとに「住宅再生分科会」という組織をつくった。

この会は、マンションの維持修繕を主題とする「メンテナンス部会」とは別に、「戸建て住宅」の改修・リフォームをテーマとした。

高度経済成長期には日本人すべてが中流であった。バブル崩壊とともに格差社会が到来した。

みき・てつ
㈲共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。